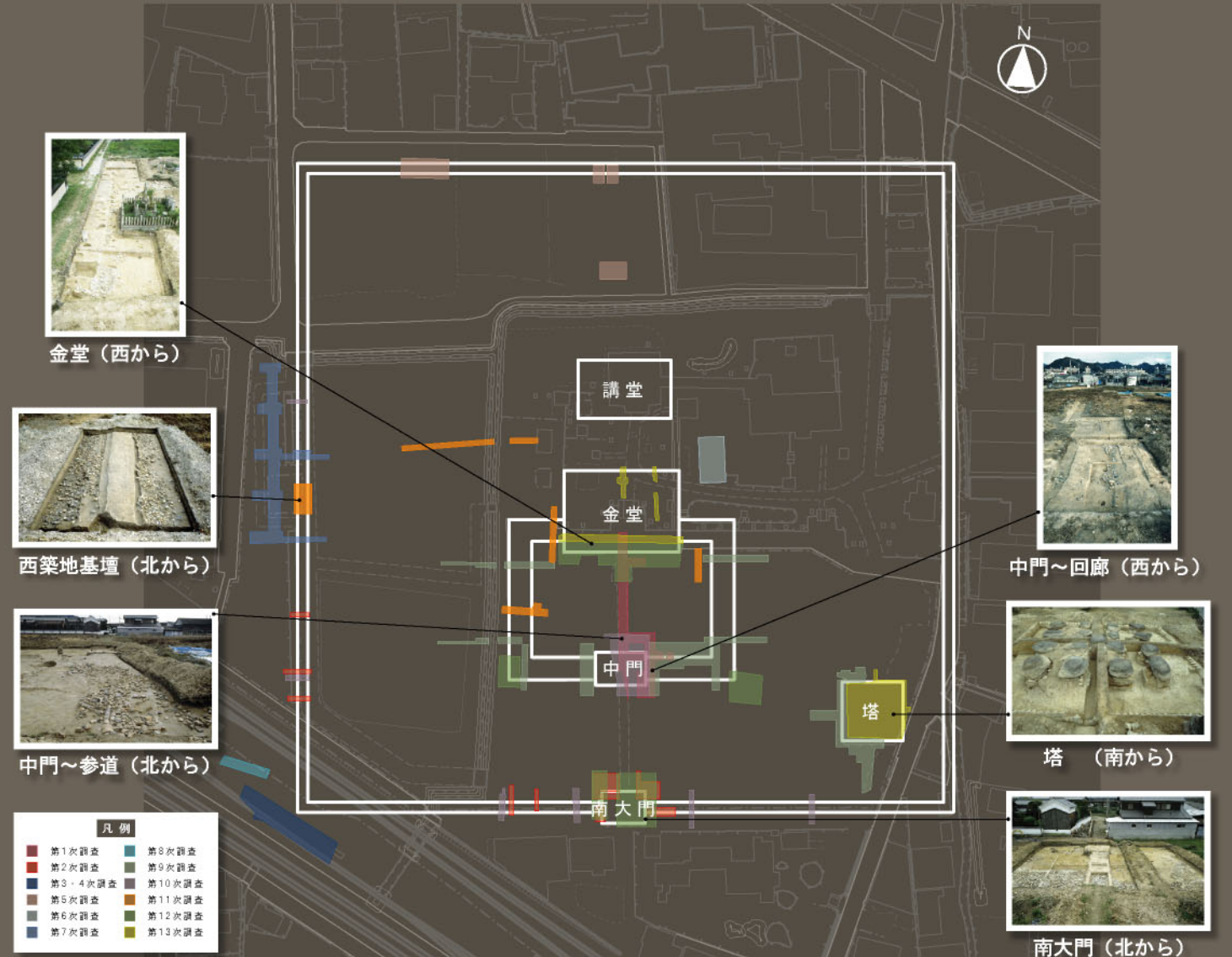
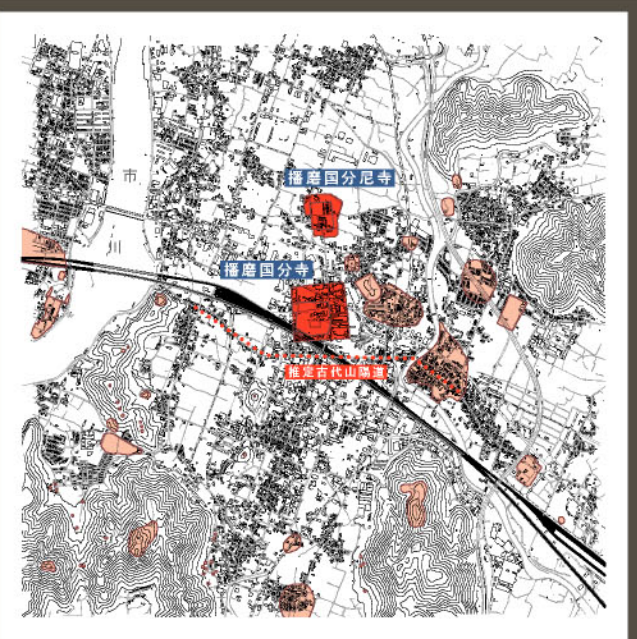


播磨国分尼寺伽藍配置図 S=1/2,000



播磨国分寺伽藍配置図 S=1/2,000



播磨国分寺・国分尼寺位置図 S=1/50,000

播磨国分寺の所在地
 姫路城付近に所在する当時の播磨国中心部からは約4kmと離れていますが、古代山陽道の近くで人目につく場所だったのでしょう。周辺には多くの遺跡があり、地方豪族の存在がうかがえます。建立場所を巡る有力者同士の駆引きもあったのでしょうか。

現在は住宅が建ち並び、国分尼寺参考地碑がその存在をかりうじて示すのみとなっています。

播磨国分尼寺の発掘調査
 国分寺の北約600mのところにあります。寺域の推定規模は、東西一三四m、南北一八〇mと国分寺より小さくなっています。平成二年から五年計画の発掘調査によって、北側と東側の築地跡や、講堂跡とみられるコの字型の溝、金堂基壇の痕跡、円形と方形二重の井戸枠を持つ特殊な井戸などを確認しました。

現在では、国指定史跡の範囲四五、〇〇〇㎡のうち、北側に半堂山国分寺が存在し、南側の二三、〇〇〇㎡の範囲を復元整備しています。

播磨国分寺の発掘調査
 播磨国分寺は、二町四方(約二二〇m)の広さがあります。一九六八年からの一三次にわたる発掘調査によって、築地堀で囲まれた寺域の中央に南大門、中門、金堂、講堂が南北一直線に並び、中門と金堂を回廊が結ぶという伽藍配置が明らかとなりました。塔跡は東南に位置していて、基壇が一段高く残り、礎石はほぼすべてが元のまま置かれていました。

現在では、国指定史跡の範囲四五、〇〇〇㎡のうち、北側に半堂山国分寺が存在し、南側の二三、〇〇〇㎡の範囲を復元整備しています。

国分寺の起源
 国分寺・国分尼寺は、奈良時代の天平一三年(七四一)、聖武天皇の勅命によって建立されました。正式名称を国分寺は金光明四天王護国寺(こんこうみやうしてんのうごこくのでら)、国分尼寺は法華滅罪之寺(ほつげめつさいのてら)といいます。総本山を国分寺は奈良の大仏で知られる東大寺、国分尼寺は法華寺とし、当時の行政区である国(六〇余国)ことに造られました。

あをによし 奈良の京は 咲く花の
 にはふがごとく 今さかりなり

正倉院御物に代表される天平文化が花開いた奈良時代には、この歌のように華やかなイメージがあります。しかし一方で飢饉や災害で国は荒れていました。聖武天皇は、国分寺に金光明最勝王経(こんこうみやうさいしやうおうぎやう)を納め、毎月転読するよう命じていますが、この経典は、広め唱えると四天王の守護により国家が隆盛し、病災から逃れられると説かれています。国分寺・国分尼寺は、国家安寧の祈りがこめられた寺なのです。